

● 関西

門田 展弥

2024年の関西音楽界は比較的平穏であったが、各オーケストラ、歌劇団、合唱団、バレエ団、そして様々な室内楽グループやソリストが、それぞれ特色を生かし工夫を凝らして多彩な音楽活動を展開した。まだ100%とは言えないが、ようやく長かったコロナ禍から脱し、音楽への集中力がコロナ禍以前より一層高まったのではないかとさえ思えるほど充実した内容であった。

まず、オーケストラであるが、大阪交響楽団は4月の定期演奏会を名誉指揮者であった外山雄三（2023年7月逝去）の追悼公演として、ヴァイオリン協奏曲第2番他、外山作品を特集した。大阪フィルハーモニー交響楽団は、尾高忠明（音楽監督）が生誕200年となるブルックナーの交響曲第0番、第2番、第1番を定期とは別枠の3回シリーズで演奏。そして、更なる演奏力の向上を目指し、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団首席クラリネット奏者ダニエル・オッテンザマーを「アーティスト・イン・レジデンス」として招聘した。関西フィルハーモニー管弦楽団は、何と言っても、オーギュスタン・デュメイ（音楽監督）の指揮する演奏が、際立って魅力的な個性であった。日本センチュリー交響楽団は、壮大なプロジェクト「ハイドンマラソン（全38回）」が、いよいよ後1回を残すのみとなった。名曲コンサートが主流のオーケストラ・コンサートの中にあつて、この試みは頗る玄人好みであり地味ではあるが、歴史的快挙として記憶されるであろう。

これら所謂「大阪4オケ」は、互いにライバルでありながらも交流と連携を深めつつ、関西のクラシック界を牽引する中心的な役割を担っている。4オケが一堂に会し、演奏を繰り広げる恒例のコンサートは、10回目となった2024年、「関西6オケ」という拡大バージョンによって開催された。4オケが演奏するだけでも尋常でないが、京都市交響楽団と兵庫芸術文化センター管弦楽団を加えた6オケは、約5時間という空前絶後の大コンサートを完遂した。よくこのプロジェクトは、「大阪でしかできない」と言われるが、話題性やファンサービスだけでなく、各オーケストラが互いに切磋琢磨し、レベルアップをはかる絶好の機会として、もうすっかり定着している。

関西6オケの枠には入っていないが、神戸市室内管弦楽団も鈴木秀美（音楽監督）の下で、独自の進化を遂げている。神戸市混声合唱団と行っている合同公演においては、初めてオペラに挑戦、ヴェルディの《ファルスタッフ》を上演した（指揮：佐藤正浩、演出：岩田達宗）。初めてとはいえ、同合唱団のメンバーにはオペラ経験の豊富な声楽家が揃っているのだから、何ら制作上の問題は生じなかった事であろう。オーケストラ、合唱団、ホールという3者が一体となった音楽展開は理想的であり、神戸市が誇るもの。3者とまではゆかずとも、どのオーケストラもホールとの連携を緊密化する努力は、今後も欠かせないであろう。その点、兵庫芸術文化センター管弦楽団は、そもそもホールに帰属するオーケストラであり、毎回、金土日と3日間連続して行う定期演奏会や佐渡裕（芸術監督）のプロデュースするオペラはいつも大盛況。まるで別世界のような感がある。運営に苦勞している諸オーケストラからすれば、羨ましい限りであろう。京都市交響楽団は、2023年4月、常任指揮者に就任した沖澤のどかが、新天地で着実に地歩を固めつつある。オーケストラの最後に、絶大な人気を博すピアニスト反田恭平の率いるジャパン・ナショナル・オーケストラについても少し触れておきたい。拠点を置くのは奈良であるが、名称の示す通り、その活動は日本各地から海外にまで及んでいる。この先、2030年にはアカデミー（音楽院）の創設も計画しており、その動向からは目

が離せない。

オペラでは、関西二期会が創設60周年を迎え、その記念公演として11、12月にJ.シュトラウスII世の喜歌劇《こうもり》を取り上げた。原語上演が当たり前となって既に久しいが、中山悌一のオリジナル訳詞による日本語上演という昔懐かしいスタイルで行われた。一方、関西二期会よりさらに早く、戦後間もない1949年、朝比奈隆を中心に旗揚げされた関西歌劇団は、何と75周年を迎えた。その長い歴史を回顧するかの如く、9月には第104回定期公演《カヴァレリア・ルスティカーナ》《道化師》を、11月には創設75周年記念ガラ・コンサートを開催した。元来がオペラハウスであるびわ湖ホールは、3月にR.シュトラウス《ばらの騎士》、11月に沼尻竜典《竹取物語》を上演。ただ、一つ惜まれるのは、2023年度音楽クリティック・クラブ賞本賞を受賞した「みつなかオペラ」が、ホールの空調設備トラブルで《トゥーランドット》の公演を取り止めた事である。小振りな同ホールで、どのように《トゥーランドット》のような大規模な作品を上演するのか、興味が持たれていただけに大変残念であった。

ホール独自の企画にも注目すべきものが少なくなかった。住友生命いずみホールが2000年から続けている「いずみシンフォニエッタ大阪」は、その最たるものの一つであろう。2023年、音楽監督である西村朗が急逝したが、西村が生前に企画していた2回の定期演奏会は恙無く開催された。あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールは、座席数がマックス335というホールではあるが、多彩で斬新な企画力を武器に、今や関西音楽界に「イノベーション」をもたらす刺激的な存在となっている。中には、やや疑問を持たざるを得ない企画もなくはないが、芸術にはそういった「冒険」が絶対に必要。5月、出演者が公募によって選ばれるフェニックス・エヴォリューション・シリーズ（共催公演）に登場したリコーダーの井上玲は、東京大学文学部卒という異色な経歴の持ち主であるが、実に洗練された演奏を披露。今後、マニアックな古楽をもっと近づきやすいものにしていくのではないかと期待せずにはいられない。

ローム ミュージック ファンデーションが開催している春の「ローム ミュージック フェスティバル」と夏の「ローム ミュージック ファンデーション スカラシップ コン서트」も例年通り多くの聴衆を集めた。周知の如く、同ファンデーションは音楽家や音楽活動の支援に毎年巨額の資金を投じており、今や日本のクラシックを支える最大最強の存在ではないかと思われる。その拠点は京都にあるが、支援活動は全国に及んでおり、その意味では、国のなすべき芸術文化の振興施策を相当程度肩代わりしていると言ってもいいのではなからうか。

バレエ界も例年通り大小様々なバレエ団が発表会や定期公演を催したが、《くるみ割り人形》をはじめとする定番が大半を占める中、10月の法村友井バレエ団《アンナ・カレーニナ》は一際目を引く演目であった。他方、小規模ながらも羽曳野のシンドウバレエは、8月に音楽から演出振付に至るまで完全なオリジナル作品《安寿と厨子王》を世界初演した。

門田展弥（もんだ・のぶや）

京都市立芸術大学にてオーボエを、大阪教育大学大学院にて作曲を学ぶ。1991年より1年間ロンドン大学ゴールドスミスカレッジに留学。月刊『音楽現代』、『関西音楽新聞』にコンサート批評等を寄稿。2023年、国際教育学会「館糾賞」を受賞。追手門学院大学客員教授。主要作品：オペラ《OTOHIME》（2015年、Hastings改訂初演）、オペラ《業平》（2016年、京都初演）、バレエ《The Crane Wife》（2018年、Bexhill-on-Sea初演）、バレエ《安寿と厨子王》（2024年、富田林初演）他